

賢い道化ジョー

ジョーの赦しを乞うピップ

The Wise Fool, Joe: Pip Begging Joe's Forgiveness

長谷川 雅世

Masayo HASEGAWA

ディケンズの作品の中で特に高い評価を受けている *Great Expectations* は、これまで多くの研究がなされてきた。その多くが、主人公かつ語り手であるピップの罪の意識はこの小説の主題だと考え、その罪の意識の原因を考察してきた。例えばバン・гент(Van Ghent)は、己の目的のために他者を道具にするという罪をエヴリマンであるピップが犯したことが罪の意識の原因だとする(133-37)。ステンジ(Stange)は、ピップに限らず罪は生の常状である(72)とし、モイナハン(Moynahan)は、ピップの罪の意識は彼の意識されない分身であるオーリックの犯した罪から生じている(80-85)と解釈する。このようにピップの罪の意識には多様で広範な解釈がなされてきた。このことから、彼の罪の意識が如何に複雑かが分かる。

しかしピップのジョーに対する罪の意識には、これまであまり注意が払われてこなかった。それは、ジョーに対する彼の罪がスノビズムゆえに取った恩知らずな行為にあることは疑問の余地もないと、批評家たちが考えてきたからだ。しかしこの物語を語り始める以前に、ピップはすでにジョーからその赦しをえている。それにも拘らず、語り手である現在のピップは未だにジョーに罪の意識を強く感じ、物語の中で彼の赦しを求め続ける。このことを考慮すれば、ジョーに対する罪は、従来忘恩という言葉で片付けられてきた罪以外にあると考えられる。そこで本論文では、語り手ピップがジョーに謝罪する理由を考察しながら、小説の主題であるピップの罪の意識の内容を明らかにし、さらに一人称小説 *Great Expectations* の持つ意味を考えたい。

ピップのジョーに対する罪の意識を知るために、まず、謝罪される側であるジョーについて検討する。ジョーの人物像はこれまで十分に議論されてきたとはいえないが、それでも彼についての従来解釈として主に次の3つが挙げられる。1つ目は、ジョーをこの小説の“true gentleman”と呼び、彼の真面目さや善良さを賞賛する解釈(Hobsbaum 236, Stone 311)。2つ目は、彼のそれらの美点を神性とみなす解釈(Gilbert 102, Kaplan 435)。3つ目は、彼の美点を認めながらも、ピップの人生の導き手になれないジョーの無力さを指摘する解釈(Leavis 302-03, 326, Herst 122-23)。これらの解釈は誤りだとはいえないが、ジョーに対する表面的な理解に過ぎず、彼の人物像を十分に説明しているとはいえない。そこで本論文では、ジョーの人物像を明らかにすることから始める。

登場人物の特徴や性格を伝える手段として、ディケンズはしばしばその人物のマンネリズムを用いる。ジョーの口癖の「恐ろしく愚鈍(most awful dull)」もその1つで、これは彼の特徴を端的に表している。小説中で彼は何度も、自分が「恐ろしく愚鈍」だと主張する。ピップに勉強を教えてもらう場面では、“Joe [...] had so plumed himself on being ‘most awful dull,’”(108)とあるように、彼は自分が「恐ろしく愚鈍」な fool であることを自慢する。さらにここでは、ジョーの自慢している姿は、文字通りに解すると「頭に羽飾りをつける」になる“plumed himself on”という表現で語られている。頭に羽飾りを付けたり鶏冠帽を被るのは、道化(fool)を明示する特徴である(Willeford 3-8)。他の場面でのジョーには、道化と密接な関係を持つ鳥(Ibid. 3-8)のイメージも与えられている。初めてサチス荘を訪れたとき、不似合いで滑稽な盛装姿の彼は頭のとっぺんの髪を「羽根の房」(97)のようにピンと立たせ、ミス・ハヴィシャムの前では、それを逆立てながら「鳥」(98)のように立っていた。その上、彼は無意味に廊下を「爪先立って大股で歩き」(98)、ミス・ハヴィシャムの質問には彼女ではなくピップに答え続けたりする(98-99)。このときの彼は姿だけでなく行動も道化的である。ロンドンに住むピップを訪れる場面では、奇妙な盛装姿のジョーが持つ帽子は「鳥の巣」(217)に例えられ、再びジョーと道化を連想させる鳥が結びつけられている。さらに、道化役者が杖や帽子を全く別の物に見たてて演技するように、彼は帽子が何か生き物であるかのように扱い奇妙な“play”(220)を演じる。

以上のようなジョーの行動や容姿、口癖から、ジョーには道化としての特質が与えていると考えられる。とすれば、ジョセフ・ガージャリーの愛称ジョー(Joe)が、ディケンズがその伝記 *Memoirs of Joseph Grimaldi* に関した人物でもあるジョセフ・グリマルディ(Joseph Grimaldi)にちなんで英国での道化(clown)の呼び名ジョーイ(Joey)を連想させる名であるだけでなく、小説中でジョーを指すのに使

われる“fool”(69, 111, 135)や“village idiot”(139)は、道化の一般的名称としての意味も持つといえる。さらに、彼は単なる道化ではなく、ある特殊な特徴を持つ道化である。

ロンドンに住むピップを訪ねたとき、ジョーはピップと共に食事をする。そのときジョーは彼を蔑む紳士然としたピップを目の前にして当惑し、目をギョロギョロさせ食べ物をごぼごぼと落とす。一方、彼のこの不作法で奇妙な行動を見たピップは、“I felt impatient of [Joe] and out of temper with him”(220)と、ジョーに苛立ちを覚える。そしてこの直後、ピップの苛立ちは、“[Joe] heaped coals of fire on my head”(220)と語り直される。ここでの“heap coals of fire on one's head”は『箴言』(25:22)に出てくる言葉で、“to produce remorse by requiting evil with good”を意味する。それゆえ、“[Joe] heaped coals of fire on my head”は、ピップの苛立ちは彼の恩知らずという不善(evil)がジョーの善良さ(good)によって明らかにされたためであることを伝えているといえる。語り手は、紳士ピップが自分の愚かさや醜さを咎められている気分になっていることを、聖書の言葉を使うことで示唆している。

ここで語り手ピップは、登場人物ピップが認めたくない真実や過ちを示すような辛辣さをジョーの内に見ている。この辛辣さとは、*King Lear*の道化がいう“bitter fool”(1.4.138)、つまり聞き手にとって辛くて嫌な隠された真実を語る賢い道化が持つ辛辣さである。その辛辣さを内に秘めるジョーは、真実を語ることのできる賢い患者、賢い道化に属している。ジョーを表すのに“the head that was full of meaning”(70)や“wisdom”(70)、“dignity”(222)などの言葉を使う語り手は、そのことを認めている。そしてジョーが賢い道化ならば、ヘラクレスのような怪力に似合わぬ彼の子供らしさは彼の純粋さを示すだけでなく、ディケンズが作り出す“child-like fool”(McCarron 40-41)の特徴だともいえる。さらに、先に挙げた口癖“most awful dull”の“awful”は、愚鈍さを強調しているだけでなく、awfulの持つ別の意味である「荘厳な」や「畏敬すべき」で愚鈍さを形容しているともいえる。アイグナー(Eigner)はこの小説に道化は存在せず、ジョーは道化でないと断言する(127)。確かに、エステラの人生の救済者になれないジョーは、アイグナーがいう意味での道化、つまり英国のパントマイムでコロムビーナを救うクラウンのような道化ではない。しかしジョーは、ウィルソン(Wilson)がいうように、広い意味での「道化(clown)」であり(271)、それも辛辣さと賢明さを併せ持つ賢い道化である。

賢い道化であるジョーは、他の登場人物たちが認めたくない真実を示し、彼らの過ちを批判する。“[A]ll the implications of seriousness, of criticism of the shallow-

ness and emptiness of sophistication and worldly wisdom”(Ibid. 271)を持つジョーが示す第一の真実は道徳に関するもので、彼は他の登場人物たちの道徳性を暴く試金石(touchstone)の役割も持つ道化(Touchstone)である。ピップに関していえば、ジョーは彼のスノビズムとそこから生じたジョーへの非道な行いという道徳的罪を示し批判する。その手段の1つとしてジョーは、頑なに道徳的美徳を体現し続ける。労働者階級の田舎者として彼を軽視するピップに常に愛情深く誠実であり続けることで、ジョーは彼の美徳との対照のうちにピップの悪徳と愚かさを暴く。ピップの道徳的罪を示すもう1つの手段として、彼は道化らしく言葉を利用する。一見無意味に思われる彼の言葉は、ピップへの批判になっている。

例えば、紳士になったピップとのロンドンでの再会の場面で、ジョーは彼に“Pip, how AIR you, Pip?”(217: 大文字表記はディケンズ)と挨拶をする。このときの“AIR”という言葉は、一見単なる訛り言葉に思われるが、実はそれ以上の意味を持つ。なぜなら、田舎に住んでいた頃の少年ピップとの会話でジョーは、“You ARE a scholar”(45: 大文字表記はディケンズ)と、“ARE”を正確に発音しているからだ。正しく発音できるジョーが、ロンドンのピップの前では“AIR”といった理由として次の2つが考えられる。1つ目は、訛ることで自分が粗野な田舎者である事実を示すため。ジョーが訛り言葉を使うとき、ピップは最も身近な親族のジョーが粗野で無教養な田舎者であることだけではなく、自分も以前はジョーと同類であったことを再認識させられる。紳士ピップに彼が恥じている“coarse and common”(105)な田舎者だった過去を思い出させるジョーの言葉“AIR”は、ピップの隠しておきたい事実を間接的に指摘し、彼の紳士気取り(airs)を揶揄する皮肉な言葉となっている。

2つ目の理由については、挨拶を交わした後のジョーの態度や言葉から推測できる。挨拶をした後ジョーは、ピップの住まいについて、自分にはこんな「狭くて通気の悪い場所(close spot)」では豚一匹さえ健康に育てられないと述べる(218)。いつロンドンに着いたのか尋ねられたときには、彼はまるで「百日咳」のような咳をする(219)。これらのジョーの言葉や行動は、彼がピップの住まいやロンドンは汚い空気(foul air)の悪環境だと考えていることを示す。このことを考慮すれば、“AIR”は文字通り空気を意味し、“how AIR you”は“how foul AIR is, for you”(なんてひどい空気なんだい)と言っていると考えられる。一方、ピップ自身もすでに、紳士の住む憧れの地と考えていたロンドンが“ugly, crooked, narrow, and dirty”(161)で、紳士の住居として与えられたバーナード・インは“the dingiest collection of shabby buildings”(171)だと感じていた。さらに、ジョーの到着を待つピップは、“Unfortunately the morning was drizzly, and an angel could not have con-

cealed the fact that Barnard was shedding sooty tears outside the window” (216)と思う。ここで使われている“Unfortunately”は、煤で黒くなりながら働く鍛冶屋を軽蔑し、金と地位のある紳士になる道を選んだ自分が汚く「煤けた」場所に住んでいる事実(住環境の悪さ)を、ピップが今から来るジョーに隠したがっていることを暗示する。それゆえ、ピップの住環境の悪さを指摘するジョーの言葉“AIR”は、1つ目の場合と同じく、ピップの隠しておきたい事実を指摘し、彼の紳士気取り(airs)を揶揄する言葉となる。これら2つの理由は、ジョーが賢い道化であることを示している。

ジョーのピップ訪問の場面には、他にも賢い道化らしいジョーの言葉がある。ロンドン見物をしたかという質問に対してジョーは、靴墨工場に行ったと答え、その工場について、実物の工場よりもピラに描かれていた工場の方が“architectooralooral”(219)だったと述べる。そしてジョーのこの奇妙な言葉から、語り手ピップは“some architecture”(219)を思い出すと語る。さらに、語尾を“tooralooral”と引き伸ばして、ジョーがarchitecturalという言葉で“Chorus”に変えるのではないかと思った(219)と語る。これらのことから、ピップが想起した“architecture”として次の2つが考えられる。1つ目は、石炭屑で手や顔を黒くしたピップがクレム様を歌いながらジョーと働いていた鍛冶場。とすれば、ジョーの言葉は、紳士然としたピップに、彼が以前は労働者階級の鍛冶屋であったことを思い出させる皮肉な言葉になる。2つ目の“architecture”は、建築物ではなくより広い意味で構成物(composition)を指していて、具体的には、田舎にいる頃にピップがビディに教わった「歌(composition)」(107)だと考えられる。ビディに教わった歌は、“When I went to Lunnon town sirs, / Too rul loo rul / Too rul loo rul / Wasn't I done very brown sirs, / Too rul loo rul / Too rul loo rul”で、その歌にはToo rul loo rulというフレーズが多すぎるとピップは今でも思っている(106-07)。だから、語尾を“tooralooral”と「コーラス」のように引き伸ばしたジョーの言葉から、彼がその歌を思い出したとしても不思議ではない。

田舎にいた頃ピップは、「賢くなるため」にビディに教わった歌を「大まじめ」に暗記していた(107)。一方、ロンドンに上京して、紳士としての教育を受けているピップには、陳腐なその歌を必死に暗記していたことは恥ずかしい過去であり、ジョーの言葉でそれを思い出させられるのは不快でしかない。さらに、棚からボタ餅式に田舎の小僧からロンドンの紳士の地位へと引き上げられたピップには、ロンドンに上京した田舎者が騙され馬鹿にされるという内容の歌を思い出させられるのは不愉快なことだ。これは、語り手ピップにおいても同様である。というのも、小説に書かれている出来事を全て経験している彼には、紳士になるべく上京したが最終的にはそれが失敗に終わった過去の自分と歌の中の田舎者

との間に類似を認めざるをえないからである．このように考えれば、ジョーの不可解な言葉“architectooralooral”も、ピップのスノビズムを皮肉る言葉だといえる．

以上のように、ジョーの一見無意味に思われる言葉は、ピップの隠そうとした真実や隠されている真実を間接的に指摘し、彼のスノビズムを皮肉る言葉となっている．道徳的真実を語る賢い道化であるジョーは、そのような言葉や美徳を示し続ける態度によって、ピップがジョーに犯した罪、スノビズムから生じたジョーへの不善な態度というピップの道徳的罪を暴き出し批判する．だが、ジョーの言葉が持つ皮肉な意味は、彼自身が意図したものでないことは留意しておくべきだ．彼がピップに非難めいた皮肉を投げかけるはずがないことは明白である．それゆえジョーの言葉に隠された皮肉は、彼を賢い道化として描こうとしているディケンズのものだと考えられる．ディケンズはジョーを媒介にピップを批判し、さらに、賢い患者という登場人物を通して“the limiting norm of Victorian society”を批判する(McKnight 43)といわれるディケンズは、ジョーを通してスノビズムという偏狭な考えを批判している．一方、すでに述べたようにジョーに“wisdom”や“dignity”，そして紳士ピップの不善を示唆する辛辣さを感じている語り手ピップは、ジョーが道徳的真実を語る賢い患者であり、自分が彼の語るその真実を無視して道徳的罪を犯していたことを認めている．それが、ピップがジョーに謝罪する理由の1つである．しかし彼がジョーに謝罪する罪はもう1つある．

ピップがジョーに道徳的罪を犯すようになる契機は、エステラとの出会いである．サティス荘を初めて訪れたとき、ピップはエステラに「ざらざらの手(coarse hands)」をして「どた靴」を履いた「卑しい労働者の少年(common labouring-boy)」(59)と侮辱される．このときから、彼は自分自身のみならず、鍛冶屋という職業やジョーを含む自分の生活に関わる全てのものを“coarse and common”だと感じて恥じるようになる．そしてピップはこのことをジョーに、“I told Joe that I felt very miserable, [. . .] and that [Estella] had said I was common, and that I knew I was common, and that I wished I was not common”(69)と暗に伝える．後にピディには、“coarse and common”だと侮辱されたので紳士になって「今とは全く別の人生」を歩みたいと思うようになったと告げている(125-26)．このことから、ジョーへの告白でピップがいう“not common”とは具体的には紳士を意味し、彼が望む未来の自分であることが分かる．ピップにとって紳士(not common)になることは、現在の自分(common)を否定(not)することである．紳士になりたいと思うピップは、過去は消し去れるし、時間の連続性を断ち切っても人生は成立すると彼

は信じている。

一方、ピップの告白を聞いたジョーは、学者や王様を喩えにして次のように答える。

[. . .] you must be a common scholar afore you can be a oncommon one, I should hope! The king upon his throne, with his crown upon his ed, can't sit and write his acts of Parliament in print, without having begun, when he were a unpromoted Prince, with the alphabet — Ah! [. . .] and begun at A too, and worked his way to Z.

(70)

最初は“common”な学者や王様は、Aで始まってZに達するように“common”から徐々に“oncommon”になるのだと、ジョーは主張している。そのジョーがピップの“not common”に代えて使っている言葉“oncommon”には、未来とは現在(common)を基盤にしてその上に(on)積み上げていくものだという彼の考えが集約されている。未来とは現在なしに(not common)存在するものでなく、その上に連続的に(oncommon)存在するものだと言き、時間の連続性という真実を伝えて、ジョーは、時間の連続性を無視できると考えるピップの誤りを示唆し忠告している。

この忠告を聞いたあと、ピップは“the best step I could take towards making myself uncommon was to get out of Bidly everything she knew”(71)と思うようになる。ここでピップが未来の自分を“not common”ではなく“uncommon”と考えていることから、彼がジョーの忠告を受け入れ、現在(common)の自分の上に未来の自分を築こうとしていることが分かる。だがこのときのピップはまだ、ジョーの忠告を本当に理解し受け入れたわけではなかった。だから思いがけない遺産相続の申し出を受けて紳士になることで、彼は徐々に“oncommon”になるのではなく、突然“not common”になれる道を選んだ。マーロウ(Marlow)が指摘するように、その申し出を承諾することは、ピップが過去を否定しようとしていることを意味する(99)。さらに、ジョーをこれ以降あからさまに軽視し拒絶することも、それと同じ意味を持つ。ジョーが最初に登場する場面で語り手は、少年時代の自分にとってジョーは「同等な者」(9)で、2人は「対」(10)や「受難者仲間」(11)だったという。食事の場面では、「2つ(two halves)」に分けられたパンの「1つ」がジョーに、「もう1つ」がピップに与えられる様子が語られる(10)。これらは、「卑しい労働者の少年」と侮辱された頃のピップにとって、ジョーは彼の分身的存在だったことを伝えている。もしオーリックがピップには意識されていない彼の分身ならば(Moy-nahan 80-85)、ジョーは彼に意識されている分身である。それゆえ、粗野な鍛冶屋のジョーを紳士ピップが拒絶することは、彼が道徳的罪と同時に、ジョーが説く時間の連続性を拒絶して過去の自分を否定しようとするという罪を犯していることになる。時間を止めようとすることで時間の流れという「創造主の定め

摂理」に背き「罰」を受けた(394)ミス・ハヴィシャムと同種の罪をピップは犯している。しかし、その罪を犯していたことを、ピップ自身認めるときが来る。

精神的かつ道徳的墮落からピップを救い出すのがマグウィッチであることは、すでに多くの批評家に指摘されている。さらに、彼を通して“imaginative sympathies”を回復したことがピップの道徳性の再生に繋がった(McWilliams 258, 264)と指摘されるように、ピップの精神的成長は彼の正常な想像力の回復と深く関わっている。その想像力が如何なるものかは、*Hard Times*のシーを考えれば分かる。正常な想像力である「心の知恵」に秀でたシーは、死者のパーセンテージを聞かれたときゼロと答える(75-76)。死亡者の親族や友人の心情を考えれば、パーセンテージなど無意味だと思ったからだ。このことから分かるように、想像力とは他者の心情を押し量り、他者の内面を見抜く力である。ピップは、命を賭けて彼に会いに来たマグウィッチを助けるという行為の中でこの力を取り戻していく。そして最終的に、捕らえられたマグウィッチに付き添うことを自らの意思で決めたとき、かつて沼地に身を隠す彼に同情を寄せたときの“pitying young fancy”(33)と同じ力をピップは完全に取り戻す。逃亡が失敗に終わった後、船の上で彼がマグウィッチに付き添う様子は次のように語られる。

[...] in the hunted wounded shackled creature who held my hand in his, I only saw a man who had meant to be my benefactor, and who had felt affectionately, gratefully, and generously, towards me with great constancy through a series of years. I only saw in him a much better man than I had been to Joe.

(441)

このときピップは、醜い囚人マグウィッチの内に彼への献身的な愛情や寛容さを見ている。ピップは他者の内面や感情を理解する力としての想像力を取り戻したのだ。ここではさらに、マグウィッチの帰国以降物語から姿を消していたジョーについて突然言及されている。これはマグウィッチについてと同様、ピップがジョーの内面を理解できるようになったことを示している。彼は愚者という仮面に隠されたジョーの賢者としての真価に気づいたのだ。その結果、道徳と時間についてジョーが語っていたことが真実であり、自分がそれらに関して罪を犯していたことを認めるに至る。だから、病から回復した後、ピップはジョーに謝罪するため田舎へと向かう。

すでに論じたように、ピップに対して常に誠実であったジョーを“common”であると疎外することは、道義に反した行為であると同時に、“common”であった過去を否定することだった。それゆえジョーに謝罪するとき、ピップは彼が犯した道徳的罪と同時に、時間の連続性を無視しようとした罪をも謝罪していることになる。フランクリン(Franklin)は、遺産相続の話が無に帰した後、ピップは、“a

purely Christian attitude toward time and change”を体現するジョーのおかげで、連続的で不可逆的な時間の流れを受け入れ、その現実には立ち向かうようになったと述べる(30-31)。確かに、ジョーに謝罪するとき、ピップは過去を否定しようとした罪を償おうとしている。しかしこのときのピップはまだ、時間の真実を完全に受け入れてそれに従おうとしているわけではなかった。

マグウィッチの死後、ジョーに看病されるピップは、「再び幼いピップに戻った」(461)気分になる。その彼に対してジョーは、“there has been larks. And, dear sir, what have been betwixt us – have been”(466)という。ジョーにとって“larks”とは、ピップが彼の徒弟になれば「楽しいこと(larks)になる」(98)とあるように、2人が鍛冶場で仲良く働くことを意味していた。それゆえジョーはピップに、2人で鍛冶屋として一緒に生きていこうとしたことは終わった過去のことだと言っていることになる。ここで彼は、時間とは元に戻すことができない不可逆的なものだということをピップに伝えようとしている。しかし病から回復した後にジョーを追って田舎へ戻るピップは、今度はジョーの説く時間の不可逆性という真実に背こうとする。

ピップが田舎に戻ったのには、ジョーに謝罪すること以外に、ピディにプロポーズするという別の目的があった。ピップにとってジョーに謝罪することは時間の連続性を無視しようとしたことの謝罪であったが、ピディに結婚を申し込むことは時間の不可逆性に背こうとすることを意味する。ピップは、ピディが彼を「許された子供」(467)のように受け入れてくれるなら、彼女と結婚して田舎でジョーと共に鍛冶屋として生きていこうとする。彼は「懐かしい台所以来の全ての人生が治まった高熱によって引き起こされた精神的混乱の1つ」(461)だったかのように、ジョーと仲良く暮らしていた頃の自分に戻り、エステラやマグウィッチに出会わなければ歩んでいたであろう人生を歩もうとする。だが、時間を元に戻そうとするピップのこの愚かな行動は、ジョーとピディの結婚によって阻まれ、彼は田舎を再び後にして、ハーバートのもとへと向かう。

しかしその後もピップは、ジョーを軽蔑して彼のもとを離れて以降の人生を悔やみ、昔に戻って人生をやり直したいと思いつけていた。11年後に帰省したとき、彼はピップと名づけられたジョーの子供を墓地へ連れて行く。そして、マグウィッチがピップのパトロンになる契機となった2人の出会いのときに、彼が少年ピップを墓石に座らせたように、ピップはその子供ピップを「ある特定の墓石(a certain tombstone)」(475: 斜体は筆者)、つまりかつてピップが座った墓石の上に座らせる。この後には、彼はピディに少年ピップをくれるか貸してくれと頼む。ピップを分身にして自分が歩めなかった人生を歩もうとしたマグウィッチと同じことを、ピップはしようとしたのだ。そして現在に至るまで、ピップは時間

を元に戻したいという願望を抱き続けている。だから彼は、第一巻の最後の場面での楽園喪失のイメージからも分かるように、ジョーの住む田舎や鍛冶屋を理想化して語る。しかし過去を「不変のかたち」(450)と呼ぶ語り手ピップは、ジョーが説いた連続的で不可逆的な時間の流れは逆らえない真実だと認めている。さらに、ミス・ハヴィシャムを通して、それに背こうとすることは「虚しさ」(394)しか残さないことも知っている。だから今度こそ本当に、彼は過去を認めて時間の真実を受け入れようとする。そのために彼は自分の過去であるこの物語を書くのだ。

自分の過去を書くことでピップは、その作者(author)と同時に自分の過去の創造者(author)になろうとする。ミス・ハヴィシャムのような過去の囚われ人でなく、過去の上に成る者、つまりジョーのいう“oncommon”になろうとする。そしてその行為の中で語り手ピップはジョーの赦しを乞う。エンディングで、未来に進むためにサティス荘の跡地に別れを告げに来たエステラは、偶然出会ったピップに赦しと和解の言葉を求める。なぜなら彼女にとって、かつて「価値もわからずに投げ捨ててしまったもの」(478)であるピップは、彼女を後悔というかたちで過去に縛りつけるものであり、そのピップから赦しをえることは、その束縛から放たれることを意味しているからだ。そしてピップが求めるジョーの赦しもこれと同じ意味を持つ。だから、かつて恩知らずな態度を取ったことの赦しをすでにえているにも拘らず、語り手ピップはジョーに赦しを求め続けるのだ。

トレイシー(Tracy)は、この小説は語り手ピップにとって、彼がジョーやビディの優しさや愛情に対して犯した罪についての懺悔だという(57)。しかし本論文で考察してきたように、従来忘恩という言葉で片付けられてきたピップのジョーに対する罪には、ジョーの説く道徳と時間の真実に背こうとしたという罪が隠されていた。それゆえ、語り手ピップにとってこの小説は、真実を語っていた賢い道化であるジョーに対するその罪の告白という意味を持つ。さらに、その中でジョーの赦しを乞うことは、彼の語る真実、特に連続的で不可逆的な時間の流れという真実に従おうとする意思のあらわれなのだ。

参考文献

- Dickens, Charles. *Hard Times*. Ed. Paul Schlicke, Oxford World's Classics. Oxford: Oxford UP, 1998.
- . *Great Expectations*. Ed. Margaret Cardwell, Oxford World's Classics. Oxford: Oxford UP, 1998.
- . *Memoirs of Joseph Grimaldi*. Ed. Richard Findlater. 1838; London: MacGibbon & Kee,

- 1968.
- Eigner, Edwin M. "The Absent Clown in *Great Expectations*." *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 115-34.
- Franklin, Stephen L. "Dickens and Time: The Clock without Hands." *Dickens Studies Annual* 4 (1975): 1-35.
- Gilbert, Elliot L. "'In Primal Sympathy': *Great Expectations* and the Secret Life." *Dickens Studies Annual* 11(1983): 89-113.
- Herst, Beth. F. "Will and Gentility: *Great Expectations* and the Problem of the Gentleman." *The Dickens Hero: Selfhood and Alienation in the Dickens World*. New York: St. Martin's Press, 1990. 117-38.
- Hobsbaum, Philip. "*Great Expectations*." *A Reader's Guide to Charles Dickens*. New York: Syracuse UP, 1998. 221-42.
- Kaplan, Fred. *Dickens: A Biography*. 1988; Baltimore: Johns Hopkins UP, 1998.
- Leavis, Q. D. "How We Must Read *Great Expectations*." *Dickens the Novelist*. New York: Pantheon Books, 1970. 277-331.
- Marlow, James E. *Charles Dickens: The Uses of Time*. Selinsgrove: Susquehanna UP, 1994.
- McCarron, Robert M. "Folly and Wisdom: Three Dickensian Wise Fools." *Dickens Studies Annual* 6 (1977): 40-56.
- McKnight, Natalie. *Idiots, Madmen & Other Prisoners in Dickens*. New York: St. Martin's Press, 1993.
- McWilliams, John P. "*Great Expectations*: The Beacon, the Gibbet, and the Ship." *Dickens Studies Annual* 2 (1972): 255-66.
- Moynahan, Julian. "The Hero's Guilt: The Case of *Great Expectations*." *Critical Essays on Charles Dickens's Great Expectations*. Ed. Michael Cotsell. 1960; Boston: G. K. Hall, 1990. 73-87.
- Shakespeare, William. "The Tragedy of King Lear." *The Riverside Shakespeare*. Ed. G. Blakemore Evans. Boston: Houghton Mifflin Company, 1997. 1297-354.
- Stange, G. Robert. "Expectations Well Lost: Dickens's Fable for His Time." *Critical Essays on Charles Dickens's Great Expectations*. Ed. Michael Cotsell. 1954; Boston: G. K. Hall, 1990. 63-73.
- Stone, Harry. "*Great Expectations*: The Fairy-Tale Transformation." *Dickens and the Invisible World: Fairy Tale, Fantasy, and Novel-Making*. Bloomington: Indiana UP, 1979. 298-339.
- Tracy, Robert. "Reading Dickens' Writing." *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 37-59.
- Van Ghent, Dorothy. "On *Great Expectations*." *The English Novel: Form and Function*. New York: Rinehart, 1953. 125-38.
- Willeford, William. *The Fool and His Scepter: A Study in Clowns and Jesters and Their Audience*. 1969; Evanston: Northwestern UP, 1980.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Martin Secker & Warburg, 1970.